

児の気質的特徴・母子相互交渉と母への アタッチメント・社会的発達との関連

三宅 和夫(北海道大学教育学部)
石川 舟()

目 的

本研究の最終年度である57年度においては、初年度において資料収集の対象とした母子29組についての縦断的資料を児の生後23カ月に至るまで収集し、さらに妊娠32週より約2年間にわたるすべての資料の分析を行い、主として次のような観点からその検討を行った。すなわち当初において設定したように生後12カ月ごろにおける児の母親に対する愛着のあり方に対して、それまでにおける母親の児へのかかわり方・育児観などがどのように影響するかということ、ならびに児の生物学的に規定された個体的特徴と考えられる気質が母親側の要因とどのように交絡して生後12カ月における母子の愛着の質を決めるのかということが第1の問題であった。さらに、生後12カ月以降における児のしつけの容易さに、愛着の質がどのようなかかわりをもつかを明らかにすることが第2の問題であった。なお、これら2つの問題の検討を通して、わが国における乳児期の社会的発達が国における乳児期の社会的発達と母子相互作用にみられる特徴にはどのような文化的特色があるかを、米国等の資料と対照することによって考察することも意図した。

以上とは別に、前述の対象については実施できなかった新生児期の気質の規定因を探索する試みとして、胎動と新生児期における活動性の関係について、本年度において新たな対象について検討を行った。

・2年間にわたる縦断的資料の分析結果

以下の報告では、生後2年間にわたり何回にわたって収集された資料の検討が行われるが、それぞれの時期において対象としたケースの数は多少相互に異なっている。これは児の状態が検査や観察に不適当であったことなどで若干のケースから

の資料収集が不能であったことによる。

(1) まず、生後12カ月時に施行したAinsworth Strange Situation Procedureの結果であるが、安定した愛着を示すB型が19名、不安定な愛着を示し、母との分離後の再会時に抵抗を示すC型が10名と分類された。A、B、C型への分類については前年度報告書に述べたので省略するが、そこではB型17、C型10、A型(母を回避するなど愛着を示さぬ型)2であったが、その後米国のこの分野の専門家に検討を依頼したところ、2名のA型はむしろB型に属するとの指摘を受けたので、上述のようにA0、B18、C10となったのである。従ってB型61.5%、C型38.5%なり、前年度報告書に表示した米国のAinsworthらの研究において見出されたA型20%、B型60~65%、C型10~15%という結果と比べると、B型の比率は同じであるが、A型がわれわれの対象にはなく、その分C型が多くなっているということが目につく。

(2) さて、新生児期から23カ月までにおいて何回かにわたって捕えられた児の行動特徴を分析してみると、2年間にわたってかなり安定的で持続的な気質的傾向が見られ、それがB、Cそれぞれの愛着の型とはっきりとかかわっていることが分かる。以下順を追って記す。(i)生後2~6日において、ゴムの乳首を吸わせておいてそれを抜き取ったときの反応について検討したが、C型6名のうち5名がはっきりとした泣きの反応を示したのに対し、B型では11名のうち7名が泣きを示す傾向が大きく、さらにC型の方が、なんらかの反応を示してから泣きのピークに達するまでの時間が長いという傾向も見られた。このことからC型の方が、興奮性の特徴が強く、母親にとって扱いにくい傾向を示していると考えられよう。

(ii) (i)の結果とともに生後1～3カ月における家庭場面での児の行動観察の結果を検討すると、C型に一貫して興奮性が高いという傾向を示していた。すなわち、B型12名のうち1名のみがよく泣き、興奮し、指をしゃぶるなどの行動を示したのに対し、C型では7名中6名がこのような行動を示したのである。(iii)生後7カ月において母と子が相互交渉している状況に知らない男性が入室してきて児に近寄って話かけるとした場合、C型7名のうち6名、B型8名のうち3名が恐れや不安の傾向を示した。さらに母が退室し知らない男性だけといっしょになった場合、C型では7名のうち6名、B型8名のうち4名が恐れや不安を示した。このような一連の設定場面を通して児の心拍数が測定されたが、知らない男性が入ってきてからの20秒間においてC型ではbaselineと比べて1分あたり14 beatsの増加が測定されたのに対し、B型では7 beatsの増加にとどまった。また、母が退室後の20秒間において、C型では22 beats、B型では6 beatsの増加が見られた。なお、baselineにおいてB型の1分あたりの心拍数は144.5 ($SD=12.5$)、C型では153.5 ($SD=16.9$)であった。これらの結果は恐れ、興奮性と心拍数やその変動との間に対応のあることを明示していると思われ、C型の児の興奮性、恐れの高さという特徴がはっきりと見られる。(iv)生後7カ月においては、さらに比較的自由的な母子相互交渉がプレイルームにおいて10分間観察された。ビデオテープの分析からC型の母親の方がB型の母親と比べて児の遊びを中断させるなどの阻止的行動を多く示していることが分かったが、これは児が恐れ、不安のためよく遊ばなかったことに影響されたということも考えられる。また、母親たちを阻止的行動の平均値で多少の2群に分けてみると、阻止的行動の多い母親9名のうち6名がC型の児、3名がB型の児をもっており、阻止的行動の少ない母親10名のうち9名までがB型の児をもっており、C型の児をもつ者は1名のみであるという対照的な結果が得られた。このことは母親の阻止的行動とC型の児との間に関連が深いことを示している。ところで母親の阻止的行動の度合と児の示す恐れ、不安の度合とを組合わせて、それらとB型・C型の分類との関係

を見たのが表1である。ここでの児の恐れ、不安の度合は、さきの7カ月時の知らない男性の接近、母親の退室の状況において測定されたものである。この表から分かることは、阻止的行動の多い母親でも、児の恐れ・不安の度合が低ければ、児の愛着のタイプはC型というよりもB型になることが多く、反対に阻止的行動の少ない母親でも、児の恐れ・不安の度合が高ければ児の愛着がC型になる場合もありうるということである。このように見てくると、児の気質的特徴と、児との相互交渉における母親の行動特徴との間の関係ということの問題にしないでならないということが言えよう。具体的に言えば、児の気質的特徴が扱いづらいものである場合には、母の児への働きかけ方がsensitive, responsiveであることが非常に大切であるが、児が扱いやすい場合には母の働きかけ方はよほどinsensitive, unresponsiveでなければあまり問題を生じさせないということであろう。このことは、high-risk infantsなどの育児の指導についての十分な配慮の必要性を示唆すると思われる。(v)生後11カ月における自由遊びの場面についての観察結果からC型の児はB型の児よりも遊びを中断して母親のそばへ走っていったりすることが多く、従ってひとつの遊びの持続時間はB型の5分に対してC型は1分と非常に短かったのである。このことはプレイルームにおけるC型の児の不安の高さを示すものと考えられる。

以上の(i)～(v)に示した結果は新生児期から11カ月までにわたって一貫して見られる児の興奮性や恐れ、不安といった気質的特徴が生後12カ月における愛着の型の分類にかなりはっきりとしたかわりをもつことを示すものであるが、(iv)において表1のような分析によって考察したように児の気質的特徴と母親の児への働きかけ方との間の交互作用の可能性が考えられ、これは今後における検討課題である。われわれは目下別の対象約30例について、生後4カ月、8カ月における母子相互作用を家庭において2時間にわたって観察し、母子間の相互交渉のあり方を詳細に分析することを行っているが、その結果と愛着の型の分類との関係が明らかになれば、上述の課題について一歩つっこんだ検討が可能となるであろう。

(3) 生後12カ月において愛着のタイプがB型・C型と分類された児について、その後本年度において生後23カ月において、再び気質的特徴の検討を行った。これは実験室において、母子がいっしょにいる状況で、初めて会う女性の検者が入室して子どものそばにすわるという場面での児の反応、検者がテストを実施するための準備をしたり、児の名前を呼んだりしたときの児の反応、さらにロボット（空かんを組合わせて作ったもので、頭についているいくつかの豆電球が点滅したり、内蔵したテープレコーダーから、男性の声で子どもに遊ぼうとよびかけるといふもの）をドアを開けて児に提示したときの反応を検討したものである。B型の10名のうち初めての女性に恐れを示した者は4名、C型の10のうちでは7名であった。また女性とロボットの両方ともに恐れを示したのはB型では1名のみ、C型では3名であった。このことから、C型と23カ月における恐れを表出との間に関連が見られ、生後約2年間にわたる児の気質的特徴の持続性ならびにそれと12カ月時における愛着の型とに関連があるということが明らかになった。

(4) 以上(1)~(3)において述べたような結果を日米比較の観点から考えると、日本の対象においてC型の不安定で母に抵抗を示す愛着群が相対的に多く、米国においてはA型の不安定で母を拒否する愛着群が多いということには、児の気質ならびに母親の児への働きかけ方の両面における差が反映しているといえよう。まず児の気質については、日本において相対的に初期からむづかり・興奮・恐れなどの特徴をもつ児が多いということが想定される、このようなことは白人と東洋人の子どもにおける不慣れな状況における恐れや抑制の傾向の差異を指摘したKaganらの研究の結果とあわせ考えてみても興味深い。つぎに母の児に対するかかわり方についてはこれまで多くの研究が日本における母子の密着度の高いこと、emotional dependenceを育てるようなかかわり方などの特色を指摘している。こうしたことが日本においてC型を多くさせ、反対に米国においてA型を多くさせているとも考えられる。そして児の気質と母の側の要因の交互作用がcross-culturallyにも今後さらに検討される必要があろう。

(5) 最後にB型とC型で、生後12カ月以後における母からのしつけに関する働きかけに対しての従順さにおいて違いがあるかどうかについて検討した。まず16カ月においては母の指示、禁止に対する従順さを、5分間の遊び場面における観察によって、20カ月においては児が要求阻止状況におかれたとき、母の説得・教示にすなおに従うかどうかを観察によって検討された。その結果いずれにおいても、児の母に対する従順さを示す反応はC型よりもB型の方が高かった。このことからC型の児の方が母によるしつけの困難度が高いということが示唆されるが、ここにおいても児の気質の要因、母の生後1年における働きかけ方の要因などとの関連が考えられ今後における検討が必要であろう。

胎動と新生児期気質の関係

新生児期の気質の規定因を探索する一つの試みとして、ここでは気質の一つである活動性について、胎動と新生児期の活動性の相関について検討する。

対象及び方法

胎動記録は表2のごとく自覚にもとづき記録することを妊婦に依頼した。また妊娠中の母親のインタビューに際して、胎動について表3のごとく質問した。新生児期の活動性はブラゼルトン新生児行動評価(NBAS)によって測定された。

結果及び考察

胎動数と出産歴は表4に示す。妊娠週数が36週以上に進むにつれて、胎動が減少することはなかった。胎動が夜間有意に多かったのは1名のみであった。性差については、蹴りと回転運動が女児に有意に多かった(表5)。

胎動数とNBASの相関は表6に示す通りで、「生命的視覚刺激(検者の顔)に対する方位反応」において、胎動総数、蹴り、及び回転運動と逆相関を見た。「生命的視聴覚刺激(検者の顔と呼びかけ)に対する方位反応」では、回転運動と逆相関を示した。胎動の多い児は生後注意能力が低いといえるかもしれない。「坐位への引きおこし」としゃっくり様運動にも相関を見た。「防御運動」

と胎動総数、及び「干渉によるなだめ」と回転運動では相関傾向を見た。胎動とNBAS項目において相関を示した関係は4つのみであったので、胎動量と新生児期の活動性に連続性があると積極的に証明することはできなかった。

妊婦による胎児への話かけ量と胎動総数とは逆の相関傾向を見いだした。これは、胎動の少ない

と感じた妊婦ほど、胎児によく話かけたということである。換言すれば、胎動が少ないと妊婦は心配になり、一生懸命に話かけたといえるかもしれない。胎児への話かけが多いとNBAS得点が高くなるかもしれないと考えて、相関をみたが無関係であった。

表1

<div> <div>児の気質</div> <div>児の愛着の型</div> </div>	恐れ・不安の 高い 児		恐れ・不安の 弱い 児	
	B型	C型	B型	C型
阻止的行動の 多い 母親	0	5	3	1
阻止的行動の 少ない 母親	2	1	3	0

表2

胎動の記録方法

1. 記 録 —— 妊婦の自覚による
2. 時間、期間 —— 朝食と夕食後30分間、臥床安静時
妊娠36～38週の一週間連日
3. 胎動の種類
 - i) シャッキリ様運動
—— リズミカルにシャッキリのようにより返す
赤ちゃんの体の動き（一つの連続を一回とする）
 - ii) 蹴 り —— けられるような、体当たりされるような感じ
 - iii) 回 転 —— ゆっくり回転するような動き

表 3

妊婦への質問（妊娠36週時）

1. おなかの赤ちゃんが動いた時、おなかをなでたりすることがありますか？
(はい、いいえ)

「はい」の場合：それに答えて赤ちゃんが静かになったように感じたことがありますか？
(はい、いいえ)

2. おなかの赤ちゃんに対して話しかけてみることはありますか？
(よくある、ときどき、たまに、ない)

表 4

ケース	胎 動 数				胎動記録週数	出生時週数	出生時体重	児の性	合 併 症
	総数	しゃっくり様	蹴り	回転					
1	21	1	16	21	38	39	AFD	♂	胎児仮死
2	86	22	13	51	38	39	AFD	♂	中毒症
3	99	14	32	53	38	40	AFD	♂	
4	104	60	25	19	38	40	AFD	♂	
5	115	70	0	45	37	41	LFD	♂	仮死 I*
6	117	20	52	45	38	40	LFD	♀	仮死 I*
7	117	43	2	72	38	39	AFD	♀	
8	134	118	15	1	38	39	AFD	♂	胎児仮死
9	142	46	46	50	38	39	AFD	♂	中毒症, 胎児仮死
10	148	58	68	22	36	40	AFD	♀	
11	166	9	51	106	38	40	AFD	♀	
12	200	158	15	27	38	40	SFD	♂	
13	264	226	1	37	37	40	AFD	♂	
14	359	130	74	155	37	40	AFD	♀	

表 5

胎 動 の 性 差

	男 (9名)	女 (5名)
胎動総数の平均	129.4 (65.6)	181.4 (90.8)
しゃっくり様運動の平均	79.4 (70.3)	52.0 (42.6)
蹴りの平均 [*]	18.1 (13.7)	49.4 (25.3)
回転運動の平均 ^{**}	33.8 (16.9)	80.6 (46.8)

(カッコ内はSD)

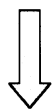
* t=2.78 P<.025

** t=2.50 P<.05

表 6

NBAS 得点と胎動数との相関 (* P<.1, ** P<.05)

	NBAS 得点														n	胎動数との相関係数			
	テ ス ト 2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	総数		しゃっくり等	蹴り	回転	
5. 非生命的視覚刺激に対する方位反応	4	3	7		7		5	1	1	7	8	5	8	11	0.40	0.27	-0.07	0.35	
6. 非生命的聴覚刺激に対する方位反応	4		4		5		4	4	2	4	4	2	5	10	0.01	-0.38	-0.25	0.43	
7. 生命的視覚刺激に対する方位反応	6		9		7		7	6	4	7	8	7	1	10	-0.63	-0.05	-0.69	-0.67	
8. 生命的聴覚刺激に対する方位反応	6		1		5		6	3	4	4	6	2	3	10	0.22	-0.17	-0.15	-0.18	
9. 生命的視・聴覚刺激に対する方位反応	6		7		7		7		7	7	8	8	4	9	-0.25	0.21	-0.58	-0.74	
13. 坐位への引きおこし	4		5	6	4		4	4	6	4	5	7	5	11	0.38	0.64	-0.27	-0.13	
15. 防衛運動	4		6		5		4	5	4	6	5	7	6	10	0.57	0.37	-0.07	0.42	
18. 状態向上の迅速性			3	1	8	1	5		2	9	3	9	6	10	0.07	0.17	0.29	-0.30	
19. 易刺激性			6				6		4	1	4	2	4	7	0.38	-0.02	-0.12	-0.48	
14. 抱 擁	4	4	4	5	4		4	4	5	4	3	4	4	12	-0.27	-0.23	0.14	-0.05	
16. 干渉によるなだめ	8	8	4	5		4	4	4	5		5	5	8	11	0.26	-0.18	0.31	0.59	
25. 自己鎮静能力	7	4	3	3	9	4	2	6	4		4	7	7	12	0.36	-0.01	0.36	0.45	



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



目的

本研究の最終年度である 57 年度においては、初年度において資料収集の対象とした母子 29 組についての縦断的資料を児の生後 23 ヶ月に至るまで収集し、さらに妊娠 32 週より約 2 年間にわたるすべての資料の分析を行い、主として次のような観点からその検討を行った。すなわち当初において設定したように生後 12 ヶ月ごろにおける児の母親に対する愛着のあり方に対して、それまでにおける母親の児へのかかわり方・育児観などがどのように影響するかということ、ならびに児の生物学的に規定された個体的特徴と考えられる気質が母親側の要因とどのように交絡して生後 12 ヶ月における母子の愛着の質を決めるのかということが第 1 の問題であった。さらに、生後 12 ヶ月以降における児のしつけの容易さに、愛着の質がどのようなかわりをもつかを明らかにするということが第 2 の問題であった。なお、これら 2 つの問題の検討を通して、わが国における乳児期の社会的発達と母子相互作用にみられる特徴にはどのような文化的特色があるかを、米国等の資料と対照することによって考察することも意図した。

以上とは別に、前述の対象については実施できなかった新生児期の気質の規定因を探索する試みとして、胎動と新生児期における活動性の関係について、本年度において新たな対象について検討を行った。